

# 青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」 自己肯定感向上プロジェクト

自己肯定感向上支援事業 -ここのえ野外活動塾-

大分県教育委員会 大分県立九重青少年の家

## 【事業のポイント】

- 体験のサイクルをプログラム実施前の「概念図」や実施後の「ふりかえり評価シート」などのラーニングツールの活用によって視覚化
- チームごとに自分で書いた概念図を見せ合いながら、意見を出し合い、パッドや付箋を使用して表現力の強化
- 話し合いで決定した目標をクリアする体験活動の充実
- お互いの意見を交換するために、楽しくかつわかりやすく記載できるように、カラー付箋紙を活用、「自分新聞」に記載し自己評価
- 活動の振り返りはもとより、周囲の関係者とのコミュニケーションの機会増加に役立つポートフォリオの作成



(星生山頂にてラーメンづくり)

## 1. 企画

### (1) 事業実施の背景

児童養護施設で生活する子どもたちの中には施設を退所した後に社会の厳しさに戸惑う様子が多く見られる。また、最初の仕事は継続せず、そのときに頼りになるのは自分自身というケースが多いと言われている。逆境に立ち向かう力をつけ、仕事においては創造的になり、人にも敬意や心の温かさや善意をもって接することができ、豊かな人間関係を作ることができる大人へ成長するためにも、体験活動の機会の充実が求められている。

### (2) ねらい

児童養護施設で生活する子どもたちが退所後に「孤独感、孤立感」に直面することに備え、これまで青少年教育施設において培われた効果的なファシリテーションのある体験活動プログラムに参加することで、仲間とコミュニケーションをとりながら、ともに困難を乗り越える場を設けたい。そこにおいては自尊感情が育ち、自己肯定感に根ざした逆境に立ち向かう力、仕事や学習における創造力、豊かに育ち合う人間関係の形成力を育みたい。

## 2. 実施概要

### (1) 実施主体(運営体制)

#### 推進会議

委員長: 大分県立青少年の家 所長 佐藤 弘幸  
 委員: 公立大学法人 北九州市立大学 文学部 非常勤講師 大西 清文  
 : 社会福祉法人 光輪福祉会 鷹巣学園 園長 金藤 勝典  
 : 大分県教育庁 社会教育課 課長補佐 後藤 裕之

#### 事務局

事務局長: 九重青少年の家 事業課長 宿利 幸伸  
 事務局員: 九重青少年の家 事業課員 栗林 太郎  
 事務局員: 九重青少年の家 事業課員 武石 久典  
 事務局員: 社会福祉法人 光輪福祉会 鷹巣学園 職員 後藤 剛

### (2) 開催実績

月 日	内 容
9月25日	第1回推進会議(組織作り、事業全体構想の検討、体験活動プログラム検討)
10月5日	第2回推進会議(体験活動プログラム詳細案検討)
10月8日	第1回体験活動(稲刈り活動)
11月3日・4日	第2回体験活動(主としてトレッキング活動 くじゅう連山:星生山)
12月14日	第3回推進会議(体験活動プログラム詳細案検討)
1月26日・27日	第3回体験活動(主として雪の活動、大雪のため中止)
2月14日	第4回推進会議(事業のまとめ、報告書の作成、次年度の計画について)

### (3) 具体的な取組の概要

#### (1) ここのえ野外活動塾の概要

##### ① 第1回推進会議

期日：平成30年9月25日(火)

場所：玖珠町 鷹巣学園

・登山のイメージ作り

子どもたちの中には、登山と言えばTV等のイメージが先行している場合があるので、チラシを工夫し、設定目標と認識のずれをなくし、参加者自身のコンフォートゾーンから外に出たくなるように概念図を書かせることとした。

・チラシの工夫

具体的にイメージを知らせる内容にし、説明会までに見せることとした。意欲の喚起につながったのではないかと。

・活動時のルールについて

冒険の書(A5ファイル)にある指示に従うことで、各参加者、指導者間の意思統一が図られた。主催者側のリードのもとに緊急時の行動を確認したことは重要なことであった。

##### ② 第2回推進会議

期日：平成30年10月5日(金)

場所：九重町 九重青少年の家

・「自分新聞」(自己評価)について

計画時作成の自己評価※シート2・3の記載について、「自分新聞」の形式で作成し各記事に評価項目を盛り込むことに変更した。また、子どもが積極的に記載した内容も十分評価に値することとした。

子どもたちには言語化できることは大きな力を獲得しているということを伝えることとした。

・自己肯定感の向上について、伸張をどう測定するか

i IKR評定による評価

ii 「自分新聞」(自己評価)の評価項目を第2回・第3回体験活動後に比較すること

※評価項目(2)は他者容認の気持ちが自己肯定に至る気持ちの前段にあるという理由から、自己肯定感向上を図るには特に重要な項目とした。

#### 【項目】

1 一つらくてもがんばったこと

2 こんなことに気づいた(うれしかったこと)

3 今回のことがこれからの行動に役立つと感じたか

(各4段階評価)

4 だれかに伝えたいこと(記述)

##### ③ 第1回体験活動

期日：平成30年10月8日(月)

場所：九重町

・稲刈り活動

稲刈りの作業後、稲刈りの大変さや作業に頑張ったことなどを話し合いにて共有、その後、ここのえ野外活動塾の意義や第2回体験活動の内容について説明。

#### ④ 第2回体験活動

期日:平成30年11月3日(土)~4日(日)

場所:九重青少年の家 久住山系 星生山

##### 【3日(土)】

・事前のスタッフ間の共通認識

1泊2日を笑顔で帰れるようにしたい。不測の事態に備え、常に最悪を想定して行動すること。子どもの対応については、基本運営サイドで行うが、命に関わることは即断即決で行うこと等を定めた。

・アンケート (略)

・チーム結成・ネームトス

立ち位置シャッフルで、子どもたちの緊張がほぐれた。

・チキンベースボール

チキンベースボールの見所は、投げた者がチームの周りを回るときにどのようにしてすばやく回るか、一方、守備側はキャッチしたチャールズ(PAグッズ)をどのようにしてすばやく後方に移動させるか、いずれも各チームの一体感を高めたほうがよい結果をもたらすものだが、その結果よりむしろ各構成員が自分の自身の垣根を越えて、他人と親密になるかということが肝心であった。

トピック:自分の意思を伝える姿

「人とコミュニケーションをとれるようになった」

(参加したある子どもの自己評価記述から。)

※本人の事前IKR評定を見ると、項目5「だれに対しても話しかけることができる」を始めとして、本人の評価は6段階中概ね4以上である。何かの潜在意識があって、この1日のアドベンチャー的活動によりストレッチゾーンのコンフォートゾーン化が起きたのではないだろうか。本人にとっては大きな1歩を外に向かって踏み出すまさに自立の瞬間である。自己を肯定し、他者へ積極的関わりができる自己を発見する瞬間であった。



11月3日  
夜の活動  
キャンプファイヤー

・登山の基礎知識(第一部)

課題「登山のときに気をつけたいこと」

チームごとに自分で書いた概念図を見せ合いながら、意見を出し合い、広用紙にまとめ発表した。※KJ法(パッドや付箋を使用)

##### 【項目】

1班

・HappyLife(楽しく登る、全員で登る、挨拶をこころがける 仲良くする)

・マナー(ごみを捨てない、石を下に落とさない)・行動(列を乱さない、コースを外れない、登ってくる人に道を譲る)・安全(けがをしない)

2班

・体温調節・声(あいさつ、声の掛け合い(参加者内の)、まわりに気を)・考える(協力、自分の道をよく見て、迷惑をかけない、途中で帰らない)

・思いやり(けんかをしない)

・ガストープの使い方

安全確保を第1に、使用する場所や手袋の使用など注意事項を確認しながら、実際に操作した。

・登山靴の履き方

事前に履くことによって、不安を解消させ、期待感の高揚を図るものとした。

・登山の基礎知識(第二部)

・パッキング

事前に知らせてあった、準備物の確認を実施した。

・ファイヤーの集い

【キャンプファイヤーの意義とは】

今回のファイヤーの意義は、火を囲んで仲間と語り合うこと、そして、理想の自分に向かって語りかけることであった。それは山頂に立つ自分であってもよいし、未来の自分でもよい。2日目の頂上に向かうための儀式的な意味合いもあれば、成長する自己のステップ段階を見せる場ともとらえられた。

【4日(日)】・星生山登山

・行程

8:45牧の戸→11:30星生山頂上→12:30昼食終了→14:30牧の戸

ガストープによる湯沸しからインスタントラーメンの作成。手順については事前に確認した内容で展開できていた。

・感謝の言葉を綴ろう

この2日間を振り返って、感謝の思いを付箋に書いて相手に伝える活動を展開した。他者から受け取った自分へのメッセージを自分新聞に掲載した。

### ⑤ 第3回推進会議

期日:平成30年12月14日(金)

場所:九重町 九重青少年の家

#### ・概念図の指導方法の修正について

子どもたちの自分新聞(評価時)の記述について、項目を定めた方が書きやすいようであったことから、概念図記述の段階において、前回の方法を以下のように修正した。

- ・視点を示し、想像していることをより言語化することに力点おく。
- ・付箋を活用。(自分で単語を付箋に書いてみる)
- ・具体例を参考に描いてみる。

#### ・前回活動等の反省に対する今後の取組について

活動の是非については、トライアル&エラーの考え方をこれからも貫き、間違った行動に即座に否定的な反応を見せないやり方が望ましいことを再度確認した。

#### ・評価について

子どもたちの「自分新聞」(自己評価)と施設職員のチェックリスト(シート1A)の相関について言及することとした。

社説欄はメダルを書かせる等、活動に対する賞賛の欄に変更した。

チェックリスト活用に関する施設職員からのコメントを評価の一部とすることとした。

(IKR評定と併せて「自分新聞」(自己評価)と施設職員からの評価による複合的な判断を図る)

#### ・第2回体験活動について

十分な準備と臨機応変に対応できる態度で臨むとして再度確認した。

#### ・活動プランの変更について

1日目の夜のスキーの実施について、魅力的だが、クライマックスが1日目にあると2日目の活動の意義が薄れるので、2日目の朝とした。

#### 【1日目】

- 1 仲間再結成
- 2 雪遊びの意義・基礎知識
- 3 雪遊びの実際
- 4 たき火の準備
- 5 スキー実習の準備
- 6 たき火セラピー

#### 【2日目】

- 7 スキー実習
- 8 振り返り
- 9 再会を期する会

### ⑥ 第3回体験活動

期日:平成31年1月26日(土)~27日(日)

場所:九重町 九重青少年の家 くじゅう森林公園スキー場

※積雪による交通遮断等有り、中止とした。

### ⑦ 第4回推進会議

期日:平成31年2月14日(木)

場所:九重町 九重青少年の家

#### (4) 新たな青少年体験活動の推進方策の検討と試行

トライアル&エラーの繰り返しによって、ファシリテーターとその意味を考え、次の体験に臨むことによって学びを獲得できるとする理論をベースに、体験活動プログラムを一過性の体験活動にさせないために、再現性をより高めることを目標に、プログラム実施前の「概念図」や実施後の「ふりかえり評価シート」などのラーニングツールの活用による効果的な視覚化を図った。

参加した児童養護施設の子どもたちや職員が、達成感や成功体験等を他人と共有することの喜びや人間関係の大切さを改めて認識し、自分に対する肯定感を客観的に認知できるように取り組んだ。

### 3. 成果と課題

#### (1) 事業成果

変容を一過性のものにしらない取組はどうあるべきかということについて、変容に至るまでのノウハウの習得や具体的な操作を将来の自分の「生きる力」により鮮明に転移させるためには、体験活動時の行動をどのようにしてフィードバックさせるかが肝要であると考えた。

実際の活動時には次の①から⑥のように展開された。①概念図の作成、②話し合い(仲間づくり)、③体験(行動)、④話し合い(共感)⑤自己評価(他者への伝達)、⑥ポートフォリオの作成、子どもたちの意欲をいかにして引き出すか、ファシリテーターの活動の終末を見越した準備力、運用力なくしては成り立たないものであった。自己評価の各項目(4段階評価)の平均が3.3となっていることから活動の成果が十分にうかがえる。

施設職員には支援者として子どものサポートに専念していただいたが、このようなファシリテーターの指導法が十分参考になったと思われる。またチェックシートは、一義的には子どもの行動観察のためであり、活動時に有効な助言や説得をもたらすツールとして活用された。副次的に、支援者としてどのように関わるか客観的に知るための資料ともなり得、支援者のメタ認知を促すものともなった。

#### (2) 事業運営上の課題

積雪による事業の中止について。天候の影響を受けずに参加者が出席可能な方法(公共交通機関の活用と併せて参加する子どもの安全の確保)を施設職員と事前協議しておくこと。活動の振り返りについて、次年度以降もポートフォリオ評価の位置づけを明確にしなが、「自らを肯定し、自らを支え続ける喜びへの気づき」のある取組を展開すること。

#### (3) 事業成果の普及啓発の課題

今回参加した児童養護施設は県内にある児童養護施設の半数であり、他の児童養護施設へ事業の成果を周知し、体験活動等園外行事に関する指導支援のあり方などをアップデートしていただくこと。

消耗品費の購入について、現行の「耐用年数1年未満かつ取得価格(税込)2万円未満」枠を広げていただければ、体験をより豊かにする消耗品の購入が可能であること。

### 4. 団体プロフィール

大分県立九重青少年の家

〒879-4911

大分県玖珠郡九重町田野204-47

TEL0973-79-3114

FAX0973-79-3115

久住山眺望

